物語 10　日本最古のおにぎりが出土
杉谷チャノバタケ遺跡

急斜面に囲まれた山の上の遺跡

杉谷チャノバタケ遺跡は中能登町の西にそびえる眉丈山麓の尾根上にあります。昭和６２（１９８７）年に石川県水道用水供給事業に伴って発掘調査が行われ、弥生時代中期後半・後期後半を中心とした集落跡であることが分かっています。

杉谷チャノバタケ遺跡

この遺跡の第一の特徴は、急斜面に囲まれた山の上の集落、「高地性集落」であるということです。遺跡は地形からＡ～Ｃの３つの地区に分けられており、Ｃ地区の標高は１０９メートル、Ａ・Ｂ地区も標高７０～８０メートルの高所に位置しています。遺跡からは非常に眺めがよく、邑知潟の中央が一望できます。

第二の特徴は「環濠」と呼ばれる深い溝が集落を囲んでいることです。この溝の断面はＶ字形で、上幅は最大３・６メートル、深さは最大で２・１メートルあり、集落のまわりを広く巡っていました。出土した土器などから地区によって掘削の時期が異なっていることが分かり、Ｃ地区が弥生時代中期後半、Ａ地区は後期後半です。

おにぎりは現在の「ちまき」か

このような高地性集落は県内では他に志賀町北吉田フルワ遺跡、かほく市高松地区大海西山遺跡（県指定史跡）や宇ノ気地区鉢伏茶臼山遺跡などがあります。いずれも弥生時代後期後半を主体としており、杉谷チャノバタケ遺跡と一部重なる時期に形成されています。当時の社会がきわめて戦いの多い状況だったことから、高所・急斜面・環濠付きのムラを作ったのです。

出土した「おにぎり」

そしてこの遺跡からは、日本最古の「綜状炭化米」（愛称「おにぎり」）が出土しています。このおにぎりは昭和６２年１１月、丘陵中腹の竪穴式建物の壁際でふたつ、完全な形で出土しました。建物はおよそ２０００年前のもので、おにぎりも同時代のものです。このように調理され、整った米は全国的に非常に少なく、見たところ携帯保存食ですが、霊的なものへ

の供物、または厄除けという「まじない」であることも考えられます。

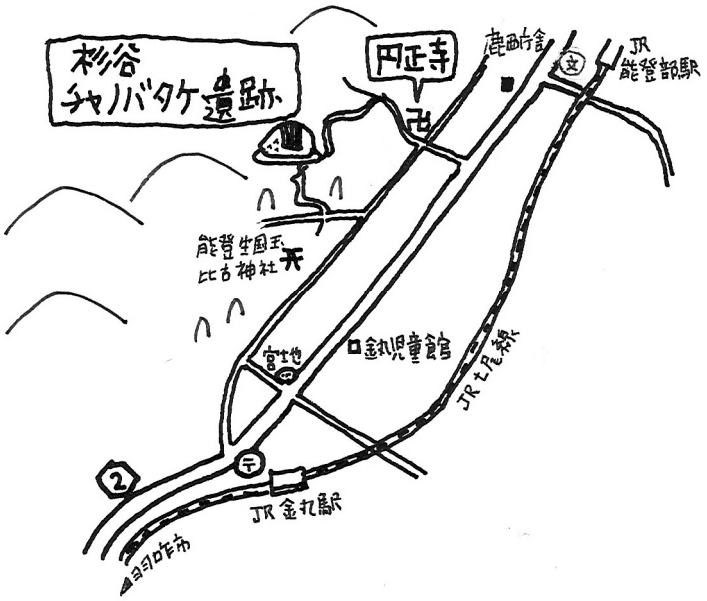
ひとつのおにぎりは底辺約５センチ、他の２辺が約８センチの二等辺三角形で、約３・５センチの厚みがあります、もう一つはそれより小さいものですが、データは不明です。

米は日本型晩稲の餅米を使い、蒸されたあと二次的に焼いてあり、現在の「粽(ちまき)」に近い食べ物と考えてよいでしょう。

おにぎり発見までこの周辺の記録をみると、旧石器時代の遺跡はいまのところ見つかっていません。縄文時代に入ると鹿西小学校遺跡で発見された押型文系の土器片が最古のものと推定できます。縄文前期ではこのチャノバタケ遺跡から土器が出ています。中期では西馬場中大門川遺跡、能登部上堂の上北遺跡半隆起線文の深鉢の土器片などが出ているほか、後期、弥生時代中期のおにぎり発見までいくつもの遺跡が見つかっています。なお、この遺跡の山側峯には杉谷古墳群が連なっていますが、５～６００年後の遺跡で、おにぎりの遺跡とは時代が異なります。

（執筆・山下正良）

【参考資料】

「いしかわの弥生時代」「鹿西なるほど百科事典」

【アクセスマップ】